



文理を横断する日本社会情報学会 モノ・コト・社会を<情報>からみる

遠藤 薫*

Crossing the Border : Japan Association for Social Informatics

Kaoru ENDO*

Abstract— The social informatics is a new field. It researches various objects, events and society from the view point of “Information.” It is consisted of transdisciplinary studies crossing the border between humanities and sciences. The Japan Association for Social Informatics (JASI) is very active. The members of JASI consist of not only scholars but also persons of business. Specialized fields of members are extensive. Furthermore, JASI began to publish the international academic journal on social informatics, “Journal of Socio-Informatics.” The mission of JASI is to contribute the quality of the global society.

Keywords— social informatics, information society, Internet, transdisciplinary studies

1. 社会情報学とは何か

「情報化社会」という言葉が世にあふれ、インターネットが日常的に使われるようになって、すでにかかなりの年月がたった。

このような時代にあって、「情報とは何か?」、「情報技術の進展は、人間関係や社会の構造にどのような変化をもたらしつつあるのか?」、「望ましい社会のデザインは何か?」といった根幹的な問いに答えようとするのが、「社会情報学」である。

2. 社会情報学の対象領域

社会情報学の研究対象は大変幅広い。学会誌に掲載される論文のテーマも多彩である。たとえば次のようなテーマがある。

- * 社会情報学の基礎理論
- * 情報・経済・都市
- * 情報社会の法とセキュリティ
- * メディアと文化
- * コミュニケーションと社会関係
- * 地域活性化とICT
- * 情報システムの社会的応用
- * 社会情報学の方法論：ゲーム論、シミュレーション、ネットワーク分析など

もちろん、この他にも多様な対象領域が考えられる。時代と併走する社会情報学においては、問題はあらかじめ

与えられているのではなく、次々と現れる新たな問題に、柔軟に対処しつつ、その背後にある一般性を発見していくという使命が課せられているのである。

3. 社会情報学の3つのアプローチ

社会情報学の対象領域が広いということから、その場その場の状況適応性が社会情報学の特性であると考えられては困る。

社会情報学は、多様な現象から一貫した普遍法則を見いだそうとするものである。その切り口として、従来十分に概念化されてこなかった「情報」を用いることによって、一見異なる現象の間関係性を見いだそうとするものである。

つまり、「社会情報学」とは、

- 1 「情報」という視点から、社会というシステムに関する理論枠組みを再構築する
- 2 新しい情報/コミュニケーション・ネットワークと社会システムの関係を探求する

その意味で、社会情報学は、新たな知を創出するダイナミックな運動である。

この運動には、三つのエンジンがある。

対象とする問題を体系的に位置づける基礎理論、対象とする現象を客観的に記述する実証・分析、問題解決のための具体的な実践、という三つのアプローチである。

そしてこれら三つのアプローチは、それぞれが孤立しているのではなく、互いに互いのエンジンとなりつつ、「社会情報学」という全体を前進させているのである (Fig. 1).

* 学習院大学法学部政治学科 東京都豊島区目白 1-5-1

* Gakushuin University, Mejiro 1-5-1, Toshima-ku, Tokyo

Received: 12 January, 2009

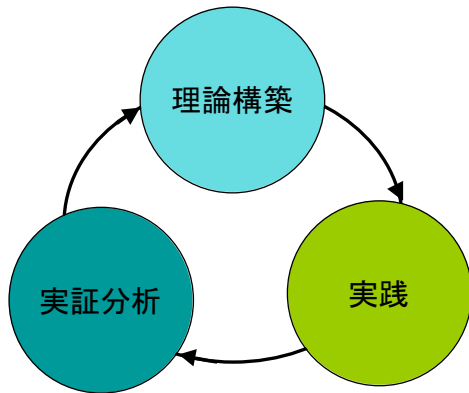


Fig. 1: 社会情報学の三つのエンジン

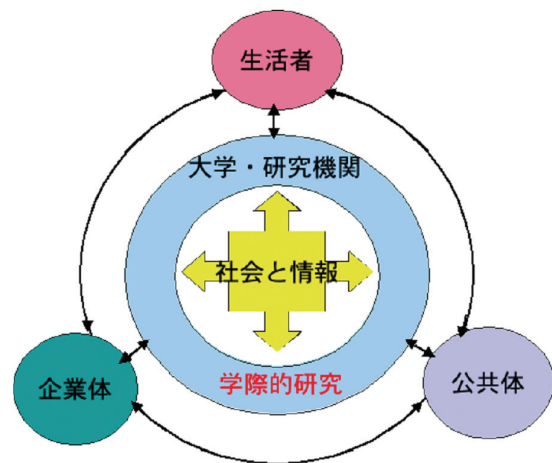


Fig. 2: 社会情報学の担い手たち

4. 文理を横断する社会情報学

日本社会情報学会が設立されたのは、1996年。「情報化社会」という言葉はすでに1970年代に人口に膾炙していたが、1990年代に入って、インターネットの商用利用解放（米クリントン政権の情報スーパーハイウェイ構想）、画期的なWWWウェブの開発、Windows95の発売など、新たな情報技術の時代が開かれようとしていた。

こうした動きは、コンピュータやネットワークなどの科学技術の進展に突き動かされたものである。その意味では、「情報科学」は明らかに理系の研究領域といえる。

しかし、情報技術は社会に重大な影響を与える。情報技術は、単に生活をちょっと便利にしたり、生産性を向上させたりするだけのものではない。人間同士の関係や社会のシステム全体に大きな変化を及ぼしかねない技術なのである。したがって、情報技術の社会的影響については、社会科学の立場からも考えていく必要がある。

ではなぜ、とりわけ「情報技術」は社会に大きな影響があると考えられるのだろうか？

それは、人間社会の成り立ちをどんどんさかのぼっていけば、「社会」とは結局、「人びとの相互作用のネットワークの総体」として定義されるのであり、ここでいう「相互作用」とはまさに、「情報（知）の交換（コミュニケーション）」に他ならないからである。

「情報」という言葉は新しく、また、コンピュータやネットワーク技術は近年のものであったとしても、コミュニケーションという行為は人間や社会にとって本質的なものである。と同時に、社会を構成するコミュニケーションの形式は、きわめて技術依存的な性格をもっていることも事実である。

こうして、「社会情報学」は、文理横断的な学問であることを避けられないし、また、すすんで、文理横断的な地平を切り開こうとするものなのである。

5. 産官学民の協働の場としての社会情報学

では、このような社会情報学を担うのは誰だろうか？日本社会情報学会が「学会」である以上、「社会情報

学の研究者」が主たる担い手であることはもちろんである。

しかし、「研究者」は大学や研究機関に所属する人びとだけを指すものではない。

「社会情報学」を、まさに「いま、ここにある問題」として捉え、研究マインドをもって問題解決に取り組もうとするすべての人びとが「研究者」である。

企業や、自治体や、生活における実践のなかで、問題を発見するすべての人びとに対して、社会情報学会はオープンである (Fig. 2)。

このオープン性を活かして、社会のなかのさまざまな「知」を再編集し、豊かな未来をデザインしていくことも、社会情報学のつとめである。

また、これから社会情報学の門を叩こうとする方々には、今後、適宜チュートリアルなども提供していく予定である。

6. これまでの活動：開かれた日本社会情報学会

6.1 主な学会活動

日本社会情報学会 (JASI) は、1996年に日本学会会議登録学会として設立された。

主な学会活動は以下の通りである。

a. 年次全国大会

毎年、時代のニーズに応える統一テーマ (Table 1 参照) のもとに、基調講演・記念講演・シンポジウム・研究発表などから構成される学会大会を3日間にわたって開催する。大会では、大学等の専門家も参加する、自治体職員の発表・討議・交流の場として『自治体職員ワークショップ』も開かれる。

b. 研究会活動

年次全国大会の他に、年間を通して以下のような数多くの研究活動等が盛んに行なわれている。

1) 定例研究会

年間5回、社会情報システムや社会情報問題に関して特定のテーマを設定し、研究者や専門家や行政幹部を講

Table 1: 最近7年間の大会統一テーマ

回(開催年)	会場	統一テーマ
第23回(2008)	東京大学	デジタル社会の課題に応える社会情報学
第22回(2007)	名古屋大学	激動の時代に挑戦する社会情報学
第21回(2006)	学習院大学	今、あらためて社会情報学を問う: 研究の成果と展望
第20回(2005)	京都大学	社会情報学フェア
第19回(2004)	電気通信大学	ユビキタスネットワーク時代の社会情報学
第18回(2003)	東京工科大学	メディアが結ぶ安心・信頼社会
第17回(2002)	東京工業大学	環境としての情報空間: その課題とデザイン

師に招いて、議論を行っている。

2) 情報政策研究会

情報政策の動向や課題に関して、関係中央官庁・情報政策関係責任者との意見交換を行う。

3) 研究部会

会員の発案により、各種の研究分科会や研究委員会が設けられ活動している。現時点では、以下の2つの研究部会が活発な活動を行っている。

*環境・教育・GIS研究部会

*社会統計調査研究部会

c. シンポジウム・セミナー等

時代の要請に応える学術的・実践的なテーマを設定し、関係学会や関係各界とも協力して、各種のシンポジウムやセミナーを適宜開催している。

d. 学会誌・学会通信

専門家による論説や、学術委員会による厳密な査読を経た学術論文等を掲載した学会誌『日本社会情報学会誌』を年2回発行している。また、本学会事業の案内・活動記録等を掲載した学会通信を年3回発行している。

6.2 外部に開かれた日本社会情報学会

日本社会情報学会(JASI)の学会活動の大きな特長は、それが外部に対して大きく開かれているという点である。前節に挙げた学会活動を見ても、テーマ、参加者のいずれの点からも、狭い範囲に閉じこもらないオープンな精神が伺えるだろう。

とくに、2005年に京都大学で開催した年次大会は、多くの他学会とのコラボレーションによって盛大に行われた。このとき、コラボレーションした学会は、日本社会情報学会(JSIS: The Japan Society for Socio-Information Studies)¹、情報処理学会、情報通信学会などであり、日

1. 「日本社会情報学会」という日本語名称の学会は二つある。一方が本稿で紹介している「JASI (Japan Association for Social Informatics)」で、もう一つが「JSIS (The Japan Society for Socio-Information Studies)」である。両学会はたまたま同時期に別個に設立されたが、本文中にもあるように、学会大会や英文誌など合同の活動も盛んであり、建設的な将来も見据えつつ、緊密な協力関係で結ばれている。(筆者も両学会の役員を兼任している)。

本における情報関連学会のほとんどが参加した意義深いイベントであった。また、こうした情報関連学会は、当然のことながら、理系から文系まで、さまざまな専門分野を横断する研究を行っており、その意味でも、特筆すべき企画だったと考える。

さらに、翌年の2006年からは、日本社会情報学会(JASI)と日本社会情報学会(JSIS)が合同で年次大会を開催し、その他の研究活動においても緊密な連携活動をとっていくことが、既定のこととなった。このことによって、社会情報学の発展はさらに約束されたものとなったといえよう。

今後は、ますます、他の多くの学会との連携を深め、まさに横断型の研究活動を発展させていきたい。

7. 世界へはばたく日本発の社会情報学

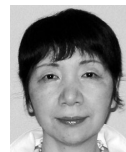
ここまで述べてきたように、「社会情報学」は21世紀の世界になくなくてはならない学問領域である。しかし、世界的に見ても、ディシプリンとしての「社会情報学」は十分に確立されていない。「社会情報」は、コンピュータ科学、ネットワーク論、コミュニケーション論、メディア論などの既存分野のなかで、ばらばらに議論されているのが現状である。

しかし、本稿でもみてきたように、「情報化」が社会の中心課題として浮上している今日、「社会における情報」に関わる多様な問題を、相互に関係づけ、包括的に論じることの重要性は明らかである。

そこで、日本社会情報学会(JASI)は、日本社会情報学会(JSIS)と合同で、世界に先駆けて、2008年、社会情報学の国際的(英文)学会誌“Journal of Socio-Informatics”を創刊した。日本を代表する研究者たちから力のこもった論文が寄せられている。WEB上でも公開されている(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jasi/site/english/index.html>)ので、ぜひご一読いただきたい。2009年初夏には、第2号も発行される予定である。

これをベースとして、今後もグローバル社会の質を高めるために、他学会、他分野との協働を深めつつ、努力していきたい。

遠藤 薫



1977年東京大学教養学部基礎科学科卒業。1993年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。博士(学術)。同年、信州大学人文学部助教授。96年東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授を経て、2003年学習院大学法学部教授。理論社会学、社会情報学、社会シミュレーションの研究に従事。日本社会情報学会(JASI)前会長、日本社会情報学会(JSIS)副会長、情報通信学会副会長、日本学術会議連携会員。